

調査日 群馬県森林組合連合会共販所 12月6日

今回は第54回目の”群馬県優良素材展示会”として開催された。以前であれば、1日中眺めていても飽きないような材が並んだものだが、最近ではさほどではない。それに伴い、昨今の木材需要傾向から、特別な優良素材が求められなくなってきている。このような催しは意味があるのか？という”優良素材展示会不要論”が出始めている。遺憾だ。確かに今回の展示材を見ても、そこそこ色が良く、年数の経った材が展示会用に見場良く丁寧に造材された物が揃っていると展示会場としての体裁は整う。しかし最高位の林野庁長官賞を見ても、特別な材と言う訳では無い。優良素材とは、植えられた時から丁寧に丁寧に育てられて百年程の間に、落雷や獣害などを受けずに時間をかけて育った木でなければならない物だ。しかし、質より量の価値が高くなり、材を生かして使うのにさほどの技術がいらず、平均的な製品を大量生産する時代に入り、高価な優良素材でも、それを生かして使う場所が無くなっている。となれば前出の”優良素材展示会不要論”に繋がる訳だ。しかし考えてみよう。現在のような形の木材需要が生まれたのは僅か20年ほどの間の出来事である。これに伴い造材技術も、機械化され高価な材の生産技術とは程遠い姿に変貌している。しかし、山にはまだ少なからず優良素材が眠っている。これを機械で伐倒し他の材と混ぜてしまっても良いのだろうか？今のままでは**名人上手**と言われた人たちの手で伐り出される筈の材を伐る技術が無くなってしまふ。また伐った材から得られる様々な情報を受け取るすべが失われてしまふ。年に一度くらいは、優良と言われる材を見て、その生い立ちを読み取る方法は、木を売る側としては勉強して、目を肥やしておくのが望ましいと思う。だからよい木を沢山見ておく必要がある



例えば左の木口は今回最優秀賞の木だが年輪の中心が極端に目粗になっている。植えてから15年位で柱が採れる太さにまで成長している。従って枝が枯れ上がって節が出なくなるのは、かなり太くなってからで製材すると、浅い所から節が出る。この状態を”**芯が開いている**”と言い価値が低いとされる。逆の場合は”**芯が締まっている**”と言い評価される。

かつて下刈り対策として、周りの植物より早く成長するように、植え付けをすると施肥をしていた。林業用の肥料は植林地へ運び易い様に15～20kgの小袋に入っていたものだった。



この年輪は元玉の様子で、年輪が右側に張り出しているのは”根張り”の部分だが、張り出しているのは”根張り”の部分だが伐採する60年ほど前に、1度張り出した根を強くこすられた跡がある。その後この傷を修復するために、この部分は成長が遅くなって巻き込んだ後に一度”胴割れ”を起こしている。この小さな割れは材全体に通り、見た目より深刻な欠陥である。小さな傷でも成長が遅れるため年輪は逆に内側にへこんでいる。



これはあまり切れないプロセッサで造材した柱材の木口である。上の写真の木口と比べて印象が悪く、値を付ける時のブレーキになる。20年ほど前に刃物を使った枝打ちをしている。しかし、この時この枝は枯れてから7~8年が経過しており、すでに死節となっている。死節は空洞が開いているに等しい。枝が枯れ始めたのは、年輪の中心から数えて8年目位からである。枯れるのが早い。

立ち遅れの様だ。生きた枝は年輪と共に成長するので年輪は節に沿って外側を向いている。枯れた枝は、木にとっては異物なので、もう枝の周りは成長せず年輪は中心へ向かって曲がり始める

やがて周りから巻き込んで死節は幹に飲み込まれる。

この材の場合、枯れ枝といえども刃物で切り落とし、年数が経っているので、これより浅い所から節が出る心配はない。柱を挽くのに問題は無い。

出来れば葉が緑色でいる内に切り落としていけば穴になる事は無かったが、枝の無い木は無いので、節そのものは欠陥とは言えない。

生節を枝打ちした良い例を紹介したかったが、今回の市では見つからなかった。

生節を枝打ちした場合は2年ほどで、綺麗に巻き込み穴になる事はない。

市況は、そろそろ頭打ちになった来た。3.0m造材が極端に無くなったので、柱材の買い方が買いに出た。柱材の流通ルートは市場の外で確立されている。

調査日 素材生産協同組合 12月7日

昨日に続いて連続の市場調査となったが、県森連が”優良素材展示会”なのに対し素生協では”お歳暮市”と銘打って開催された。

こちらの目玉はどこかの神社の社木として表示されていた、おそらく350年生程のスギだが、元玉は大きな空洞になっていて内側には炭になっている部分もあった。空洞の部分はもちろん不明なのだが残っている周りに部分はよく目が詰まり、油ものっていて古木によく見られる独特の色合いを呈している。一番の元玉から先端まで出品されているが、中間が無い。元玉は2m前後に何本かに玉伐られており、おそらく空洞が無くなる所を探った様だ。空洞の無い2~3玉は前回市で売れたのであろう。先端の玉は、3.0m程だが見事な大節に覆われている。節の大きさは元の方で10cm程はあろうか。これはこれで価値がある。もちろん他の3.0m材と一緒に製材すれば、どうにもならない代物だがどんなに技術が発達しても、人間が一代で創り出せるものではない。この木は江戸時代初期頃に芽吹いた命である。350年と言う樹齢に敬意を払って、この木を活かす使い方をしなければならない。又この木にふさわしい場所に使えれば、この木は更に何百年もの命を得られるだろう。とは言え良い所を売った残りであるから、値は安い。

市況は国有林材が良い値で完売している。一般材では極端に姿を消した3.0m材が、国有林の造材マニュアル通りの造材で出品されたおかげで、柱材を主に生産していた買い方を中心に競うことになった。落札単価は一時的に跳ね上がっている。素生協の発表では、需要動向が今一つ見えない所があるが、昨日の県森連の市では3.0m柱材に1物件辺り6~7枚の札が入っている。競争の激しさが伺える。では3.0mの需要が出てきたのか？と言えば、そうとも言い切れない。ただ工場を回すための手持ち材料が枯渇している事は間違いない。しかしこの値で仕入れた材で生産した柱を売る時は利益が薄くなるに違いない。事業を継続する中での浮き沈みである。

ここからは県森連の話になるが、先日森林組合の研修会で、県森連の渋川工場を見学する機会に恵まれた。土場には秋の新材が溢れていたが、隣りの土場に古い材が見受けられた。「あれは何だい？」と尋ねると、「3.0mの材が全く売れなかった時に、県森連の工場としての役割を果たすために受け入れた材である。新材と一緒に挽けないので、まだ手が付かない」との事だった。原木市場の安定を図るための努力が見て取れた。